

入試分析 国語

【総評】素直に解ける問題ばかり。かなりの易化。

国語で高得点を確保できた受験生が合格を勝ち取ったのでは？

1・2が漢字の読み取り・書き取り、3が物語文、4が論説文、5が評論文という構成は今まで通り。ここ2年で受験者平均点を少しずつ下げてきた国語だが、今年の問題は素直に考えられるものが多く、落ち着いて解き進めれば90点以上を確保することも可能だ。

【問題分析】

1・2 漢字の読み取り・書き取り(1問2点×10問=20点)

1の「河畔」「慕(って)」の読み取りが正解できれば、漢字の問題は全問正解できるだろう。なお、2の書き取りはすべて小学校で習う漢字であった。

3 物語文(1問5点×5問=25点)

すべて選択形式の出題。問1から問5まで、すべてが傍線部の前後に描かれた内容で判断できる素直な問題。学生のような若い主人公を扱った小説からの出題が多い都立共通問題の国語だが、今回は主人公が引退して故郷に戻ったバレリーナ。年齢を重ねた主人公が新たな人生に向かう物語は新しさを感じるが、目標に向かって情熱を傾ける姿には受験生も共感し、読みやすい内容であったはずだ。

4 論説文(1問5点×4問+作文10点満点=30点)

問1から問4までが選択形式の問題。例年長めの文を用いた選択肢で受験生を悩ませるものもあるが、今年は3と同様に素直な問題であった。「フェイクニュースは偽の情報なので多くの人々はそれを信じることはないが、それを娯楽として扱っている。情報には正しさも必要だが、人々を成功に導くものでなければ意味がない。」という前半部と、「アナログ情報である人の心をデジタル化しようとするれば、人の心はやがて消滅する。」という後半部を正しく理解すれば、全問正解は十分可能だ。問5の作文も「アナログ情報である人の心を大切にしながらAIと共存すべきだ。」という筆者の主張に沿えば書きやすかっただろう。

5 古文を伴う評論文(1問5点×5問=25点)

すべて選択形式の出題。ただ今年には助詞の識別と現代仮名遣いの2問の言語事項の出題があり、本文内容に関する出題が1問減って易化した。都立高校の出題はいわゆる古典の問題ではない。引用される古文には現代語訳が付く。古語の意味を問う問題もその現代語訳を参考に解くだけで、あまり馴染みのない内容に惑わされず、落ち着いて解き進めればよい。過去問や模試で慣れておくことも大切だ。

入試に向けての学習アドバイス

文法や言語事項と古典以外、残念ながら中学校の授業ではまるで対策できない。ただし都立高入試の共通問題では国語が非常に易しい。普段から話題の新書や古典を扱った随筆(白洲正子の著作は都立高入試での出題率が高い)を習慣的に読んでおくことはおすすめしたい。

北進ゼミナールの授業ではテキストを使い、普段あまり自分からは読まないようなジャンルの論説文を中心に解く機会を設けている。実は、これが一番手っ取り早い入試対策かもしれない。